

辻元事件の根本原因は 制度的欠陥にある



橋爪大三郎
Hashizume Daisaburo

*

今回の辻元清美さんの事件は、第一幕と第二幕があるのです。

第一幕。市民運動出身の辻元さんが、若くてチャキチャキの、やり手女性議員としてさっそうと国会に乗り込み、委員会の質問などで、老練、老獪な政治家たちをやりこめた。汚職や利権に無関係な彼女が、ほかの議員では指摘しにくい問題を、彼女の視点で掘り起こし、政界に「市民感覚」を持ち込んで、政界の暗黙のルールを崩していくところに、国民は喝采したわけです。辻元さんの存在は、尻すぼみの社民党の一枚看板になっていた。

第二幕では、辻元さん自身の秘書給与疑惑が発覚し、攻守が裏返しになった。秘書給与が実際には秘書本人に払われておらず、詐欺ではないのかと追及される立場になった。彼女は鈴木宗男氏のような自民党の大物政治家たちを追いつめたわけですが、その結果、似たような疑惑で身に覚えのある政治家には、目障りなほどの存在感を持つまでになった。どこかに頭のいいひとがいて、秘書給与の件であげられますよと検察に入れ知恵したのでしょうか。同じ論法で狙い撃ちにされたわけです。

政治家のモラルや道徳、規律違反を攻撃するのは、野党がよく使う政治手法ですが、私はあまり感心しません。政治家の本筋は、政策論争にある。政策を立案し、法律をつくり、国会の論争を通じて世論を喚起することにある。政策論争を挑んでも相手にされない、弱い野党は、ついスキャンダルを暴いて攻勢をとろうとするわけだけど、振り返りあうのがおち。今回もそのパターンだった。どんなに遠回りに見えても、政策論争を仕掛けなければ、野党は政権を取れない。

辻元さんは、議員になってから、政策を勉強したり議員立法を試みたり、熱心によくやっていた。行動力もあった。この調子で地道に活動を続けていけば、実力ある政治家に育ったでしょう。でも、世間を受けたのは、政治家のスキャンダル追及のほう。鈴木宗男議員に向かって「あなたは疑惑の総合商社

です」と迫るシーンが繰り返してニュースショーで流されて、そちらの面ばかりスターになってしまったことが、彼女の不運だったとも言えます。

*

辻元清美さんの秘書給与の件は、贈収賄など政治的スキャンダルとは別の次元の、単なる制度上の問題だと私は考えています。

そもそも、現在の公設秘書の制度が、政治家の活動実態にまるで合致していない。まともに政策研究をしようとすれば、すぐ一〇人、二〇人といったスタッフが必要になる。それがチームとして活動しているのに、全員を国費では雇えない。そこで名義を借りて資金をプールし、実際に分配した。いまの制度だと、政策秘書を雇うには、資格試験の合格者か、議員の公設秘書経験一〇年以上などの条件を満たした人をみつけて届け出ることが必要で、みつかなければ国費はもらえない。そこで、名義貸しがしばしば行なわれていた。だから社民党でもほかの党でも、秘書給与を上手く運用するノウハウがアンダーグラウンドで蓄積されており、少なくない議員が似たようなことをやっていた。

こういう制度をつくったのは、政治の実態を知らない役人に違いない。予算の制度は、税金の使途を国民が監視しコントロールするという趣旨から、細かな規則をいろいろ定めている。そのため、ルーティン・ワークでない業務（たとえば政治や研究や……）の現場では、有効に実質的にお金を使うことがむずかしい。税金を使って政治家の活動を支援するならば、予算でしぼらず、資金は渡し切りとし、かわりに厳密な会計報告を求めて事後チェックするのが、もつとも有効なやり方だろう。

現在の制度は、みなさん違反をしなさいと、違法行為を作り出しているようなもの。実質的に不正はなくても、大勢の形式犯が生まれる。そうすると、政治の世界ではありがちなことですが、恣意的に、

誰でも好きなきときに失脚させることができます。もしも辻元さんがあれほど目立たなければ、問題にはならなかったでしょうが、彼女をつぶすには、こういうところでも突くしかなかった。彼女はそれほど、クリーンだったということでしょう。

辻元さんがやったことは、業界のモラルに反していない。その代わり、法律に反している。もちろん法律に違反することは、いいとは言えないわけです。でも、現実には合わない法律は、それ自体が間違いだと私は思う。政治を実質的に機能させるため、現場の実態に合わせた法律をつくり、その厳格な執行を求める。そうすれば、モラルと法律が一致する。モラルと法律が一致していないという困った現状を、この事件は明らかにしたと思う。

*

政治には金がかかるんです。具体的にどう金がかかり、その金を国民がどう負担すればいいのか。お金が有効に活きて、政治のよりよい意思決定や政策形成に結びつくには、どのような仕組みが必要か。加えて、二度と今回のようなつまらない事件を起こさないとすむように、制度をどう変えていくべきか。議論の本筋はここにあるはずですが、誰もそこを考えていない。ただの無関心。無関心だから、族議員がはびこり、業界慣行が生まれ、その矛盾を突くという野党の潔癖主義や、清潔な政治をすれば現状がよくなるという不健康な幻想さえも生まれてくる。

では、なぜ無関心なのか。ひとつには、源泉徴収制度なんていうものがあるからだと思う。日本の就労人口の約八〇パーセントがサラリーマンといわれるが、サラリーマンは所得税を源泉徴収されて、確定申告をしないから、税金を納めている実感がない。アメリカでは、納税義務者は全員必ず自分で確定申告を行なう。クリスマスのあとの「灰色の一週間」に、領収書の山と格闘する。それで税金はいくら

か計算するから、税金の使い道にも厳しい眼が育つのです。

源泉徴収制度はもともと戦時立法で、大東亜戦争の戦費をすんなり確保するために導入された。戦争が終わってもこんな制度が続いていること自体、市民社会の原則を踏みこむものなのです。納税額を自己申告するという民主主義の原則に反して、給与から天引きしてしまうなんてとんでもない。源泉徴収と年末調整のおんぶに抱っこで、サラリーマンが納税にまったくノータッチでいられる。結果、納税者意識（税金を取られているという感覚）がゼロとなり、政治に無関心となる。

政党助成法も、とんでもない悪法ですね。各党への交付金は、私たちの税金が出所なのに、得票数や議員数に応じて自動的に分配されてしまう仕組みのため、有権者は、自腹を切って政党を支援しているという気になれない。

選挙に行かない人が多いのも、政治にかかるお金を自分が負担しているという感覚がないせいです。じゃあ、どうしたらいい？

具体策は、きわめて簡単。有権者の寄付でもって、政党を運営し、政治家の活動を支えるようにすればよい。もっと寄付をすればいいんです。非現実的だと思われるかもしれない。けれど私に言わせれば、お金を出さずに世の中がよくなると期待するほうがよっぽど非現実的だ。切符を買わずに目的地まで行けると考える、ただ乗り思想、キセルの思想ではないか。「政治には金がかかる、それを自分が出すのだ」という常識を育てる。これこそがモラルです。多くの国民にこのモラルが欠如しているから、公設秘書制度をはじめ、さまざまな不備な制度がほったらかしになっている。

辻元さんのケースも、元をたどれば、国民が政治にお金を出す仕組みをきちんとこしらえていないために起きた事件なのです。

個人が政党や政治家に政治献金をしたら、税額からその全額か、かなりの部分を控除できるようにする。現行制度みたいに「控除額は」……寄付金の合計額から一万円を差し引いた残額に三〇パーセントを

かけ……」（政党等寄付金特別控除制度の例）などとケケケチしたことを言っているのは、集まるものも集まらない。コンビニで黨員チケットや、政党への寄付を扱うのもいい。税金をその分安くし、払い込みの手続きも簡単にするなど、献金しやすい環境を整えれば、かなりの人が寄付を考えるはずだ。なにより政治家個人や支持政党に直接お金が渡るのはいではないか。

実際に献金が増え、自腹で政治にお金を出しているという感覚をもつ人間が多くなるほど、その使途にも監視の目が及ぶようになる。政治のモラルの再構築は、ここから始まるのです。寄付では、必要額の三分の一しか集まらないようなら、残りの三分の二を、寄付が集まった額に応じて、税金から上乗せするという方法もある。税金から出しても、このやり方なら害が少ない。

*

ところで、辻元前議員は国民にどれほどの損害を与えたのか。一人あたまいくらになるか、実際に計算してみるのも悪くないだろう。

事実上破綻したりそな銀行には、二兆円の公的資金（要するに税金）がつぎこまれた。この場合、国民一人当たりの負担額は一万五千円の計算だ。りそなのほかにも、これまで銀行に注入されてきた公的資金の合計額は、一五兆円はくだらないはず。そうなると、国民一人当たり、軽く一〇万円を超える計算だ。

いっぽう辻元前議員が政策秘書給与から「騙し取った」とされる金額は約一九〇〇万円。国民一人当たり一五銭弱にしかない。こんな細かなことを追及して、その暇に政策を失敗すれば、その百万倍もの金額が、国民の懐から失われてしまう計算だ。

こう言うとき、「詐欺は詐欺だ」「金額の問題ではない」と、反論が返ってくる。正論ですね。でも、金額でなければ何なのでしょう。



2002年3月20日
疑惑釈明の記者会見に向か

秘書給与の件で、辻元さんは国民の代表にふさわしくないと議論が起こった。話が混同されていると私は思う。誰でも法に触れれば、罰せられる。それには、刑事責任を追及すればいい。「詐欺」などと騒いでいるが、単なる形式犯。刑法犯にはならないのではないかと思う。いっぽう辻元さんが国会議員を辞職したのは、政治責任の問題です。政治責任とは、国民に対する責任だから、国民の判断で追及をストップすることもできるのです。特に、多くの政治家が似たようなことをやっていて、しかも政治活動のためだとすれば、辻元さんだけが国会議員を辞めなければならぬというのはおかしい。このような、いわば形式犯で、政治家ひとりの政治生命を奪ってしまうのは、日本の有権者にとって損失だと思う。

私たちは政治家に、何を求めるべきか。政治の本筋とは、国民を幸せにすること。より良い政治をすることでしょう。より正しい、より合法的な政治をすることができれば、なおよい。政治家を選ぶのも、モラルを要求するのも国民であるのだから、自分が政治家に何を求めているのか、一人ひとりが明確に意識し、優先順位をつけないかぎり、辻元さんのようなケースが繰り返されていくだろう。

今度の事件でもっとも強く感じたのは、辻元さん自身がどうというより、辻元さんの追及に喝采を送り、こんどは辻元さんを追い落としてよしとする、世論なり有権者なりの政治感覚のなぶさ、ワイドショー民主主義の無責任さですね。